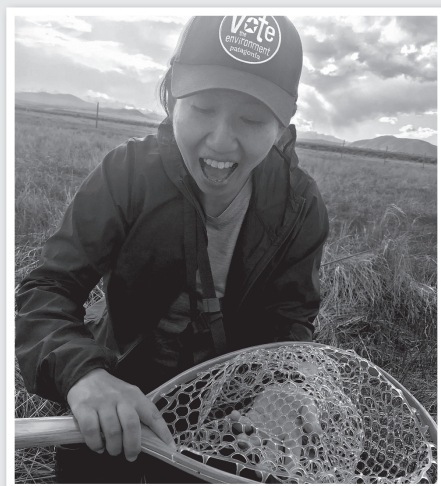




社会に溶け込む 「企業」の未来像

パタゴニア日本支社 環境社会部
アクティビズムコーディネーター

中西悦子氏



—— お仕事の内容を教えてください。

パタゴニアという企業でアクティビズムコーディネーターをしています。アクティビズムコーディネーターとは、「私たちは、故郷である地球を救うためにビジネスを営む。」という企業のミッションステートメントを、たくさんのステークホルダーの方々と一緒に実現していくお仕事です。例えば、NGOなどが環境問題の現場で行う取組を発信する時のお手伝い、研究者や自治体、他の企業、最近では若い世代とのネットワークキング、そしてそれらに対するパタゴニアとしてのリソース提供など、幅広く企画を行っています。現在22あるストアそれぞれに配置されているアクティビズム責任者や本社他部署も含め、社内外の多種多様な方々と日々仕事をしています。

—— 「企業」のあり様について、どのようなお考えでしょうか。

これまで企業という存在の多くが自社の利益もしくは経済発展の名のもとに、人材、リソースを抱え込んでいた

とも思います。社員への投資の意味で重要な役割を担っていた点もありますが、優秀な人材が所属組織にとらわれています。様々な社会問題が顕在化してくる中で、問題を発見、解決できる登場人物が実社会に足りていません。より多くの人材の参加が気候危機などの解決には不可欠です。営利企業にいる人でも、従来の経済合理性の文脈にとらわれず、企業の外には社会が広がっているという意識を持つことで景色が変わります。このように考える個人は増えていると思いますが、事業単位、企業単位という意味ではまだ少ないのが現状です。しかし、いずれは企業という存在も社会に溶け込んでいき、社員一人ひとりが市民としても幅広く活躍できていると思っています。

実はNGOも同様かもしれません。私自身、様々な団体と直接関わることを通じて、個別の団体を支援・協働するだけではなく、NGOを囲む社会のエコシステムの醸成が大切であることに思い至りました。大小さまざまな組織やグループがそれぞれのミッション

のもとゴールを目指す。そしてそれらがお互いに関わり合うことが、大きな力になると信じています。

—— パートナースhipを体現されていますが、日常で大切にされていることをお聞かせください。

立場が異なる中で、相手の話を「聴く」ことを意識しています。同じ事柄や体験も、その相手がなぜそのように表現するのか、ありのままに受け取ることが大事です。同じ気持ちでなくても理解し共感することができます。また、「学びあう」ことも重要です。様々な場づくりにおいて経験豊富な方や専門家をお呼びする場合も、一方的に講義ではなく社会の一員として相互に学び合うことによって、社会をより多面的に捉えられます。

気候危機のような喫緊の問題が叫ばれていますが、健全な環境が人間にもたらすお金や物質以外の豊かさがそもそもあります。自然環境を守ることは、貧困や福祉といった人間社会の問題にもつながりがあります。私はいま直接的に貧困や福祉などの問題にアプローチできていませんが、良い循環につながる自然と人との関係づくりを通じて、一人の市民としても活動や仕事を続けていきたいと思います。

【聞き手：つな環編集部】



多様な主体が参加するワークショップを企画運営

中西悦子 (なかにし えつこ)

2002年パタゴニア日本支社・渋谷ストア入社。2007年より環境部門で環境助成金、非資金的な環境NPONGOの支援、環境キャンペーン、イニシアティブを担当。アクティビズムの責任者として、気候危機をはじめとする環境・社会問題の解決にむけ社内外の様々なステークホルダーと協働、共創する。助成先を対象とした宿泊型ワークショップ「草の根活動家のためのツール会議」を企画運営。パタゴニア製品との出会いのきっかけでもあるスキーを楽しみ、ボランティアでは、北海道に生息するシマフクロウの研究者とともに保護活動に参加。